
恋する乙女よ牙を磨げ

桜 子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する乙女よ牙を磨げ

【Nコード】

N1770H

【作者名】

桜子

【あらすじ】

”文学少女”シリーズのパロ。ななせ視点で、登場人物がみんな黒くなっています。特に、井上心葉と琴吹ななせは原型すら怪しい……。更新するのがしんどい作品です、いつになるかわかりませんが、気長に待っていてください。

序 片思いの男の子（前書き）

他の作品と同時進行で書きますが、

毛色は全く違います。

原作ファンの方、申し訳ありません……

序 片思いの男の子

中学生のときに見た井上心葉は、笑顔の素敵な男の子だった。

初めてあった彼に話しかけられてから、わたしの人生は一変した。わたしは、あの図書館でのことを忘れない。彼の声を、高鳴るわたしの鼓動を、忘れられるはずも無い。

それは、わたしの初恋だった。

だから、高校生になって彼と同じ学校に通えることが嬉しくないはずも無い。

だけど。

井上心葉は変わってしまった。

あの笑顔は、もう見られない。

太陽のように眩しくて暖かくて、何よりも優しくかったあの笑顔。

井上言葉は変わってしまった。

だからわたしは、あの女を許さない。

井上を変えた、あの女を。

だからわたしは取り戻す。

優しかった井上を。

昼休みになると、井上の机の周りが慌ただしくなる。

別にみんなでお弁当を食べているわけではない。むしろ、みんなが場所を空けている。

もちろんそれは、井上のために。

井上と机を向かい合わせ、クラスの男子が真剣な様子で話している。確か弓道部の芥川だろうか、背の高いイケメンだが、まあ井上の足下にも及ばない。

本当ならあの場所にいるのは、あんな木偶の坊じゃないはずなの

に。

くやしくてくやしくて、世界が赤く染まりそう。

「ななせ、どうしたの!？」

いきなり耳元で叫ばれて、わたしは危うく悲鳴を上げそうになった。そして、隣にいた森ちゃんのことにようやく気がついた。

「な、なに、森ちゃん」

「なにじゃないよ、一緒にご飯食べようって言ってたんだよ。それなのにななせ、ぜんぜん気がつかないんだから」

すこし怒ったようにほおを膨らませて、森ちゃんはお弁当の包みを広げ始めた。わたしも自分の机に座って、お弁当を取り出す。

食べる前にまず森ちゃんのお弁当をチェック。白身魚のフライで茶色になったところをタルタルソースでカバーしようとしているが、残念ながら手が回りきっていない。レタスもふやけてポテトサラダを押さえきれしていないし、ご飯の盛り方もふりかけのまぶし方もいまいち。

芥川くんに食べてほしいなんていつているけど、本当にそのための努力をしているのかしら？

「わあ、森ちゃんのお弁当、かわいい」

「えー、そんなこと無いってば。ななせのほづがキレイに出来るよ」

あたり前田。

「そんなことないよー。それに、森ちゃんのお弁当なら誰でも喜んで食べてくれるよ、きつと」

ちらりと芥川（の正面の井上）を見ながら、小声でささやいてみせる。

そうすると森ちゃんは顔を赤くして、「ああん、ななせえ!」なんていいながらあたふたする。

わかりやすすぎて、涙が出そう。

「でもさあ、井上君もよくやるわよねえ、メールの代打ちなんて」
そう呟く森ちゃんの視線は、ずっと芥川にむかっている。

そして多分わたしは、井上の方に。

井上がラブレターの代筆を始めたのは、入学間もない4月からだったとおもつ。

今では中等部や他校にも顧客はできて、整理券を手に入れるのも難しいという話を聞いた。

依頼人とその相手のプロフィールから細かい値段設定が決められていて、たとえば公立高校の二年生男子が慶応大法学部のおネエ系への代筆を頼むと一回7000円はとられるらしい。

でも、井上の本職は出会い系サイトせのメール代打ちで、今も芥川が依頼をしている。こちらのほうが安い料金は先払いで、そのかわり必ず依頼主をデートさせるまでメールをする。そして、井上が依頼を失敗したという話を、わたしはまだ聞いたことが無い。

昼休みにまとめた商談は、放課後に文芸部の部室でさばかれる。そしてその場所に、天野遠子はいる。

天野遠子は井上を文芸部に引き込み、穢した。

知らずのうちにフォークを持つ手に力がこもっていた。齒の欠けたフォークをしまい、残りはスプーンで食べることにする。後でフォークは処分しないといけないけど、それは仕方ない。次から気をつけなきゃ。

A子に見られた気もするけど、笑ってごまかす。

井上の女になるのなら、これくらいのことでは焦ってはいけない。あくまで自然体だね。

「あれ。ななせ、スプーンでプチトマトを食べるの？」

「うん、トマトがとってもかわいかったから、刺すのがかわいそうになっちゃったの」

「あああ、わかるわかる！ そうだよねえ、かわいいおかずって優

しく食べてあげたくなるよね」

「うん、そうでしょ？」
死ね。

「それじゃあななせのかわいいトマトを、ひとつもらいまーす！」

「ああつ、じゃあわたしはポテトサラダをもらい！」
もう一遍死ね。

あ、ポテトサラダ結構おいしい。

「「ねえ」」

森ちゃん、空気読もうね。わたしがしゃべる所だよ。

「森ちゃん、先にいいよ」

「え、ななせが先にいいよ」

「いいっていいって、先に言つてよ」

どうせ大した話じゃないだろうし。

それよりポテトサラダの作り方教えてほしいな、これはそこそこの役に立ちそうだから。

少し時間を置いてから、声を小さくして森ちゃんはしゃべりはじめた。

「あのさ、芥川君って好きな娘とかいないよね？」

そっちかよ、とは思ったけれど、顔に出すようなドジはしない。

だって、森ちゃんは親友だもん。

わたしは7割くらいの優しさを声に込めて、森ちゃんに言った。

「大丈夫よ、彼女がほしいから出会い系なんて使っんでしょう？」

「うん、でも……」

不安そうな顔をしてわたしにすぎる森ちゃんは、普段のパー子よりはかわいらしく見えた。

だからわたしは特別に、もう5分くらいの優しさを込めてあげた（あくまで10割は井上心葉に）。

「男の子だからね、一度火遊びしたくなるものなのよ。でもね、すぐに飽きてそんなバカなこと止めてくれるから、森ちゃんは心配しなくてもいいわよ」

止めて、森ちゃんに振り向くとは限らないけど。

わたしが優しさをこれだけ振りまいてあげたのに、森ちゃんは相変わらずうじうじしている。ごはんがまずくなるから、止めてほしいなあ。

いい加減うつとうしくなったから、もうこんな会話終わらせようかしら。

「ああん、森ちゃんったらかわいいなあ！」

そういいながらわたしは森ちゃんにいきなり抱きついた。

井上にはツンデレで攻めようと思っていたが、井上にはそっこの属性が無さそうだからこつちを解禁した。

バカのふりして頭がいいなら、井上も振り向いてくれるはずだもん。

「やつ、もーななせったら」

おどろきながらようやく笑い出した森ちゃんは、元のパー子だった。少し残念かな。

森ちゃんの肩越しに井上の方を見ると、芥川と握手をしているところだった。

どうやら商談がまとまったらしく、野口さんを何枚か置いて芥川は席を離れる。

それを見送る井上は、商談用の笑みを浮かべていた。

目元が少しも笑っていない、冷たい笑み。

「ななせ、ちよっと痛いってば」

あたり前田。

其ノ弐 恋する乙女と秘密の小部屋（前書き）

一方的な被害者妄想をお楽しみください。

其ノ貳 恋する乙女と秘密の小部屋

「井上つてさ、どーしてメールの代打ちなんかしてるの？」

わたしは頭が悪い女のフリをして井上に話しかけた。ポイントはさり気なく演技っぽさを入れて、ホントは頭がよくて計算も出来るってことをアピールすること。

井上相手の会話って疲れるなあ。けど、惚れた方が負けなのよね……。

井上はこちらを見ずに、メールを打ちながら答えた。

「儲かるから、それと面白いからかな」

それだけ言うと、また沈黙。女の子と話しているのに顔も向けないなんて、どうよ!?

放課後の教室には私たちを含めて5人しか残っていないくて、井上のタイプ音だけが静かに流れた。

その静寂の中で井上は彫像のように動かない(右手以外)。1枚の絵のような光景に、わたしはしばらく息をするのも忘れていた。

あの頃の井上の笑顔も素敵だけど、いまみたいな氷のような横顔も、わたしの心を静かに揺さぶる。

「琴吹さんも、代筆を頼みに来たの？」

急に話しかけられて、わたしは本当に驚いた。だって今、井上に見とれていたんだから……

「え、ごめん。なに？」

「いや、いいよ。僕の勘違いみたいだったから」

井上は携帯電話をしまうと、鞆を手にして席を立った。

「僕はそろそろ行くから。じゃあね、琴吹さん」

わたしに(ここを強調)軽く手を振ると、井上はそのまま教室から出て行ってしまった。

後に残されたわたしは、その幸せの余韻に浸っていた。

出来ることなら井上の机を抱きたいんだけど、人目があるから出

来そうにないし、仕方なくわたしも教室を出ることにした。

そしてまっすぐ図書室へむかった。

文芸部の部室をモニターするために。

井上が教室を出た後、何人かの客と打ち合わせをすることは調査済みだったから、わたしは余裕を持って地下室の前まで来た。

出しゃばりの竹田をおいはらうのに苦労したけど、なんとか井上が入る前にモニターとマイクを準備できたのはラッキーだった。ひどいときは10分も粘るこのガキは、今のわたしと違う意味で危険で、同じくらい危険な存在。油断だけは決して出来ない。

6個の鍵をすべてかけ、盗聴・盗撮をチェックするのに計8分。煩わしいけど、最低でも週三でチェックをしないと落ち着かない。

南京錠に至っては無論のこと。恋する乙女に秘密は付きものなんだから。

そしてようやく、わたしはモニターをオンにし、ヘッドフォンをつけた。

今日こそはあの性悪女の尻尾を掴んでみせる。いつか必ずボロをだすはずだから。

『ねえコノハくん。いつになつたら次の三題嚙を書いてくれるの？』

これだけ苦労してみても腹が立つことに変わりはない。貧乳の鳴き声だった。分かっていても腹が立つことに変わりはない。現在文芸部には、井上と貧乳しかない。それを見せつけられた気がした。

ねえ神様、この仕打ちはひど過ぎじゃないですか？

わたしはぺちや子の映った画面2つを消し、残りの井上だけが見えるようにした。

ちなみに、一応取り付けておいた貧乳専用カメラは、未だに使っ

た試しがない。

『またですか、遠子先輩。8日前に書いてあげたばかりですよ』

『だって、前のコノ八くんは一週間に一度はお話を作ってくれていたでしょう？ どうして減らしちゃったのよ。これ以上コノ八くんのお話を食べれないと、飢え死にしちゃうわよ！』

『それだけ騒げれば上出来ですね。週末には書いてあげますよ、気が向いてたらですけど』

あーん、と泣きながら膝を抱える貧乳を、井上はもう見ていない。というのは嘘。

だって最初から見てなかったんだから。

井上はウルトラモバイルを取り出すと、コンセントをつないでからパワーを入れた。OSが立ち上がるまでに携帯電話で段取りを確認する。もちろん、出会い系の代打ちだ。

『ねえコノ八くん、もう出会い系サイトなんて止めましょう？ そんなもので手にした出会いなんて、少しも美しくないわ。ほら、あの作品、えーっと……』

井上は貧乳を無視し、iPodからイヤホンを引っ張って装着する。

『読んでもないケータイ小説のタイトルなんて、思い出せるはずも無いでしょう』

『ちがいますー！ ちゃんと最初は読んでたけど途中から食べれないから飽きちゃったけど、ちゃんんと前書きは読みましたー！』

『あーはいはい』

井上も大分適当だ。

『それとね、コノ八くん。文芸部の部費でパソコンや携帯電話を買うのは止めてくれないかしら……』

『誰のおかげで文芸部があると思ってるんですか？』

『でも、わたしのご飯を買うお金が……』

『それこそ部費じゃなくて生活費でしょう？』

『ああん、コノ八くんのいじわるっー』

わたしは途中からヘッドフォンを外していた。やたらと疲れたからだ。

あの性悪女、いつまでたっても本性見せやがらねえ……

其ノ参 彼と誠実な友達（前書き）

今回は芥川くんメインで。

其ノ参 彼と誠実な友達

「仕事と収入のバランスがとれてないんだよ」

出来の悪い生徒を諭すような井上の声が聞こえた。

井上はサンドイッチをほう張りながら、芥川はコッペパンが喉を通らないようすで向かい合っている。どうも様子がおかしい。そもそも井上が2日続けて同じ人とお昼を食べているなんて、それだけでも許せない。

お弁当の包みを開き、わたしは一人で箸をへし折りながら二人の動向に気を配った（本日の森ちゃんはお休みします、ご了承ください）。

「職業が非常勤の大学講師で、年収が10000〜15000だよ。これは現実的に考えてあり得ない。そもそも、年収が10000近い女は手を出すべきじゃないんだよ」

話を聞いて、芥川はサクラかなんかに引っかけたみたいだと思った。井上としては、これを放っておけば自分の仕事にキズが入ることになるから必死なのだろう。

「しかし、マリ子さんは本当に誠実な人なんだ。井上はメールを見ていないから分からないだろうが、俺には彼女が嘘をついているようには見えないんだ」

芥川は手にしたコッペパンの存在すら忘れて頭を抱え込む。髪にくっついているのはマーガリンなのかしら、汚いなあ。

わたしは折れた箸をしまつて新しいのを出してから、まず卵焼きから食べ始めた。色といい形といい、井上に食べてもらえないのが残念なくらいの出来映えだ。

井上は優しいから、そんな芥川でも見捨てない。辛抱強く声をかける。

「でも実際、待ち合わせの場所には来てくれなかった」

「それは仕事の都合が付かなかつたからだ」

「非常勤講師なのには？」

「非常勤だからだ」

「あれって週に2コマか3コマしか仕事が無いんだよ？」

「だが実際に、急な学部の報告会が入ったんだってメールが届いている！」

「非常勤講師まで呼ぶ急な報告会って、どうなのかな？」

芥川の指の隙間から、コッペパンが零れ落ちる。ポロポロと。涙を吸ったコッペパンは、塩味が効いている分美味しいかもしれない。失敗。私のお弁当がまずくなる。

うおお、と声を上げる芥川を、クラスメイトは見て見ぬ振り。せつかくのイケメンが台無しだ（繰り返し返しますが、本日の森ちゃんはお休みします。なにとぞご容赦ください）。

井上は相変わらずクールだ。仕事するときには表情を崩すこと無く、淡々と優しい言葉を振りまく。

「ねえ、芥川くん。昨日僕は言ったはずだよ。君はアタリとサクラの区別を付けることができない、それっぽい言葉を並べられると、警戒せずにそれをころっと信じてしまう」

「だから、マリ子さんはサクラなんかじゃないって言っているだろう！」

ガタン！ と大きな音を立てた芥川だが、自分のやったことに気がつく顔がさっと青くなった。

恐る恐るといった様子で、芥川は井上の顔を伺った。

無理も無い、とわたしは思った。井上を怒らせるということは、学内外の井上信者（井上を落とす神とあがめている）を敵に回すことなのだから。

それに、芥川は紛いなりにもイケメンだ（井上ほどではないんだけど）。なかには井上信者に便乗してくる輩もいるかもしれない。

僅か数秒の間に生死の狭間へと立たされた芥川。

しーらないつと。

息が詰まりそうな時間を、わたしはマリネサラダをつまみながら

見つめていた。

汁っぽいものは無理に同じ箱に詰めず、別に小さな入れ物を用意しておくといい。

「ねえ、芥川くん。君は昨日、僕がこれだと決めた女性にしか連絡は取らないって約束してくれたよね？」

「あ、ああ……」

「でも君は、僕との約束ではなくてマリ子さんとのメールを選んだ」

「いや、確かにそれはそうなのだが……」

「芥川くん」

井上の声は、吹雪のように暗く冷たい。

ああ、かつこいい……。

「君は直接あつたことも無い人とクラスメイトを比べて、あつたことも無い人を信じるんだね。僕にはできないよ。君はそれだけ誠実ってことだ。僕は、君のそんな所を尊敬している。本当だよ、僕だつて出会い系には煮え湯を飲まされたことがあるんだから」

「いや、オレはそんなつもりでいったんじや」

「でも、それだけに裏切られた方の気持ちも分かるつもりなんだ。

それは君だつて同じじゃないのかい？」

「あ、ああ。そうだな……」

「それじゃあ、僕はもう一度君を信じることにするよ。だつて、友達だからね」

井上は握手もせず席を立ち、芥川だけが残された。それからまた頭を掻きむしり、うんうんと唸りだした。

この期に及んでまだ悩んでいるのかしら。

わたしはアスパラのベーコン巻を食べながらそう思った。

アスパラは塩水で洗ってから電子レンジで加熱するのがコツ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1770h/>

恋する乙女よ牙を磨げ

2010年11月21日02時23分発行